

【 テーマ 】

佐藤 暁彦氏によるドラマーからみたビートルズ

～リンゴ・スターのドラミング考～

- ・前半 ドラム・セットについて；ドラムはどんな楽器なのか
- ・後半 1 LOVE ME DO：三人のドラマーの演奏の違い
- 2 ABBEY ROAD：THE END におけるドラム・ソロ

私はもう半世紀以上ビートルズを聴き続けていますが、実はビートルズを音楽的に本当に理解しているのかどうかは不安のままなのです。

ギターを少しだけ弾くことが出来るので、ビートルズの曲を一人で弾くことはありますが、バンドを組んだことは一度も無く、人前で弾いたり歌ったりしたことも殆どありません。こんな私にとって、ビートルズとはレコード盤の中の存在であり、レコードから流れる楽曲が全てと行って良いのです。

そんな感じなので、ビートルズの演奏の中で最も理解できないのがリンゴの演奏するドラムで、一体上手いのか下手なのか分からないし、またバンドの中でドラムがどんな役割を果たしているのかさっぱりなのです。ギターやベースは、少しはギターを弾ける所為か、何となく判った気になれますが、殊ドラムとなるとさっぱりなわけです。なんせ一度もドラム・セットを触ったことが無いのですから、当然といえば当然ですが……。かつて音楽の先生からはリズム感が無いとのお墨付きももらっていますし……。

思い起こせば、私の育った時代の音楽の授業では、ビートルズなどは音楽では無く騒音であり、エレキ・ギターを弾くなど不良の所業だと決めつけられていました。従ってドラムの音楽的な解説など皆無でしたし、集合演奏におけるドラムの役割はおろか、ドラム・セットを構成する個々の楽器の名称や役割など、我々が理解できるような説明などありませんでした。

そんなわけで、縁あって知りあうこととなった佐藤さんが、プロのドラム演奏者だと知った時から、いつの日にかドラムに関する私の疑問を吐露し、その疑問に答えてもらおうと考え続けてきました。

ご存じかも知れませんが、昨秋ある書籍が発売されました。『革新の天才ドラマー リンゴ・スターの研究』がそれで、入手後すぐざっと目を通してピンと来たのが、この書籍の構成をベースに私の疑問を佐藤さんにぶつけ、それに答えてもらう形式での“音齋処、をやってみよう、でした。

この書籍は大まかに云うと、前半はドラム・セットという楽器に関する内容、後半

は具体的な楽曲でのリングのドラミングの解説、という二部構成になっています。これに倣<sup>なら</sup>って“音齋処、も、楽器としてのドラム・セットについて佐藤さんに解説してもらう時間と、ビートルズの二つの楽曲を例にドラミング・テクニクについて、演奏を交えて解説してもらう時間、の二部構成を考えています。

・前半（約1時間） **ドラム・セットとは；ドラムはどんな楽器なのか**

佐藤さんが実際に使っているドラム・セットを例に、その構成について、個々の名称や役割等々、初歩的なイロハについての説明と質疑応答をお願いしました。

=休憩 15分=

- ・後半（約1時間）
- 1 LOVE ME DO：三人のドラマーの演奏の違い
  - 2 ABBEY ROAD：THE ENDにおけるドラム・ソロの再現

ビートルズは1962年10月5日に7吋シングル盤「LOVE ME DO」でレコード・デビューしました。で、このデビュー曲「LOVE ME DO」のドラム演奏をしているのはリンゴ・スターではありません。実は「LOVE ME DO」は、三人のドラマーによって演奏されているのです。

今我々が普通に聴く「LOVE ME DO」は、アンディ・ホワイトと云うセッション・ドラマーが演奏するものです。このヴァージョンではリンゴはタンバリンを担当しています。リンゴがドラムを演奏する「LOVE ME DO」は『オリジナル・シングル・ヴァージョン』と呼ばれる7吋シングル盤ファースト・プレスのみです。「LOVE ME DO」でのリンゴのドラム演奏は、このシングル盤を除き、ビートルズ解散後の1980年まで正式なリリースはありませんでした。

その上に、話を複雑にしているのは、ご存知の通りリンゴ・スターは「最後にやってきたビートルズ」で、デビュー直前にビートルズに加入したドラマーであり、それまではビートルズのドラマーはピート・ベストという人物だったことです。ある理由でデビュー直前にピート・ベストからリンゴ・スターにドラマーが交替したのですが、デビュー曲となった「LOVE ME DO」をピート・ベストもデビューに向けたセッションで演奏していて、その録音テープが残っているのです。その結果、「LOVE ME DO」にはドラマーが違い、それ故ドラミングが異なる三つのヴァージョンが存在し、今ではその全てを聴くことが可能なのです。

こうした<sup>いきさつ</sup>経緯は、今となっては様々な資料で誰でも知ることが出来ますが、50年以上前のビートルズ・ファンにはほとんど知られることはありませんでした。ただ、『ジョージ・マーチンはリンゴのドラミングが気に入らなかった』という話だけは、若い頃にも何かで読んだか、或いはラジオで聞いたかして、既知感がありました。

## ◆ LOVE ME DO：三人のドラマーの演奏の違い

さて余談が過ぎました……私が知りたいのは、ピート・ベスト、リンゴ・スターそしてアンディ・ホワイトの三人の演奏がどう違うのか、それぞれのドラミングの特徴などがあればそれはいったいどんなところなのかを、ドラマー視点で教えて頂きたいのです。また、ピート・ベストやリンゴ・スターはドラマーとして技量が劣っていた（つまり、下手だった）のかという点も。この点が最大ポイントでもあります。

「LOVE ME DO」のドラマーが三人居るといふのには理由があります。これも有名な話なので知っている方も多いでしょうが……；実は、当時のパーロフォンのレコーディング・プロデューサーであったジョージ・マーチンがピート・ベストのドラミングを気に入らなかったのと（ピートを除く）ビートルズの三人もドラマーとしてのピートに疑問を持っていたらしく、デビュー直前のセッションの結果でピート・ベストを解雇し、新たにリンゴ・スターをメンバーとして迎えたのです。

そしてリンゴ加入後のセッションでも、ジョージ・マーチンがリンゴの出来が気に入らなかったのも、セッション・ドラマーのアンディ・ホワイトを使ったテイクを録音し直した、ということです。リンゴの演奏盤は『オリジナル・シングル・ヴァージョン』と呼ばれる位なので、シングル盤のセカンド・プレス以降（とLP）の為に新たに録音し直したということです。シングル盤の初回プレスのロットが正確に何枚なのかは知りませんが、少なくとも五千枚位はあるでしょうから、製作費的にいえばジョージ・マーチンの決断というか判断は相当大きなものであったことは窺い知れません。裏を返せばそれほどリンゴの演奏に問題があったことになってしまいます。

そうした点を踏まえ、佐藤さんから見たこの三人のドラム演奏は本当の処どうなんだろうと……。実際の音源を聴きながらその違いをお話ししていただきます。

リンゴ・スターは、今回参考にした書籍では『革新の天才ドラマー』と記されています。ただ私の記憶によれば、ビートルズ現役時代にはリンゴ・スターのドラマーとしての評価は決して高いものではありませんでした。当時の評価は彼の『革新性』から来るものなのか。であれば、その『革新性』とはどんな処なのか……。そんなことも知りたいと思います。

➡ 1962.6.6 ピート・ベスト演奏 ANTHOLOGY 1 Disc1 M22

➡ 1962.9.4 リンゴ・スター演奏 The Beatles Box LP1 A1

➡ 1962.9.11 アンディ・ホワイト演奏 LP - Please Please Me

## ◆ ABBEY ROAD : THE END におけるドラム・ソロ

もう誰もが知っていると思いますが、ビートルズの楽曲のうちリンゴ・スターがソロ演奏をしている曲は殆どありません。公式発表全214（213）曲中リンゴ・スターがドラム・ソロをしている楽曲は、LP「アビーロード」B面に収録された、通称「ザ・ロング・ワン」（そんな云い方、私の若い頃には誰だって言ってなかったし聞いたことがなかった）と云われるメドレーの最後を飾る曲『THE END』の曲頭のみなのです。

LP「アビーロード」は兎に角<sup>とかく</sup>素敵な楽曲が多い、優れたアルバムで私は大好きなのですが、その中でもB面のメドレーは秀逸で何度聴いてもまた聴きたくなります。特にリンゴのドラム・ソロは、若い時に初めて聴いた時の感動を今になっても聴くたびに思い出す、私にとって忘れられない演奏なのです。そんなリンゴのドラム・ソロを佐藤さんに再現してもらいながら、リンゴの演奏のどこに人を惹きつける魅力があるのか（ないのかも知れないですが）佐藤さんの解釈を交えお話いただきたいと思います。

➡ LP - Abbey Road B3-10